

特54

# 村座筋書

61



東京國劇社

日田



明治二十五年五月二十一日

筑紫鴻松千代咲

序 滿久 太宰府社頭の場 太宰府社頭の場  
 二幕目 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し  
 三幕目 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し  
 四幕目 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し  
 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し  
 大 話 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し 同 返し

中幕淨瑠璃 積懸雪關の戸  
 淨瑠璃 常盤津連中

追風眞帆 漢黒舟  
 第二番目 向島料理家之場  
 序 滿久 向島料理家之場  
 同 返し 向島料理家之場  
 大 話 本所演路郎之場

渡邊橋後 宮下三右衛門 片岡我童  
 長峰宗貞 黒船忠右衛門  
 宮下妻栞極 吉村下女お達 河原崎國太郎  
 忠右衛門女房お梅 錦倉屋後家お萬  
 津川仲右衛門 順徳孫右衛門 中村鶴藏  
 番當三九郎 塚本隼人  
 淺倉九十郎 濱名宗三郎 中村鶴五郎  
 小方實千與之助 澤村主税 澤村比次郎  
 辨持かん孝 與女中岩橋 戸岡九重  
 山本藤五郎 有村運平 關孫六  
 藍木退藏 たばこや喜六 河原崎國藏  
 澤田作兵衛 仲間宅内 中村斷八  
 萬右衛門娘お浪 腰元浪路 澤村田之助  
 藝者小漣

宮下大男三之助 中村兒福  
 菊地貞行 善黨依田新助 澤村訥子  
 鎌倉房五郎八 渡邊吉之助 市川金太郎  
 與女中お輝 醫師横田宗悦 中村雁八  
 忠右衛門母お倉 手代彌五七 市川市友  
 丹藏妹お袖 倉橋の娘おらう 中村取女之丞  
 依田仲間直助 馬淵和平太 市川照藏  
 若黨笹山丹藏 福徳屋眞石伴門 市川壽美藏  
 はんじ物の身平 濱路源左衛門  
 鷲坂頼母 吉村娘千代咲 中村福助  
 順徳娘お花 後に愛妾初花 中村福助  
 小野小助姫 墨染櫻の精  
 吉村主膳 秋月幸之進 中村芝翫  
 關守關長衛 大友黒主 中村芝翫  
 御門庄兵衛

○序 滿久 太宰府社頭の場 本舞臺正面朱のりの大鳥居  
 左右朱のりの玉垣梅の立樹同じく釣枝毛毬を掛けたる床  
 几すべて太宰府天神鳥居前の体愛に仕丁五人酒に酔ひて  
 仲間喧嘩を仕居るを近習の侍ひ「山本藤五郎澤田作兵  
 衛」留て居る体神樂にて幕明く「仕丁」お上のお手當を頂  
 きッソ酒を呑み過しての仲間喧嘩といふを聞て「山本」お  
 手當の香通しと有れば「澤田」今日は酔す以後をたしな  
 め下叱られ仕丁は下手へは入る「山本」重役の渡邊が小身  
 よりして飛鳥を舞す勢ひ「澤田」手鳥吉之丞の利發をほめ  
 夫ゆゑ渡邊が大空に一味せしがア、いふ人に取り入らぬ  
 は不覺と申す者「山本」不覺といへば御用人たる忠義さま  
 んの吉村主膳へつらい飾らぬ普賢氣「澤田」夫に似ぬ娘の  
 千代咲奥方のお側に仕へ美人の上上手利と聞くと話しの  
 内花道も醫者「横田宗悦」出て来たれり「澤田」夫は目にも  
 たいト是にて兩人は「澤田」夫に知らせ申すとト鳥居の内  
 へ這入る「宗悦」梅を見て居る所へ「澤田」仲右衛門「出て  
 来れば「宗悦」お跡を慕ふてまゐりましたるなには渡邊

横と御同道ではムリ升ぬか「澤田」渡邊氏御代參の役目  
 身ともは奥方のお側に仕へる吉村が娘の千代咲奥がたの  
 御代參に参附いたすと聞き差向ひで咄さんと待て居るが  
 身共へ用事は「宗悦」お頼みの一義、毒藥の包みを「澤田」へ  
 渡すを請取り「澤田」是さへ聞へおく時は極意の計策しか  
 し當殿さまには聰明に在ませば隠密く「宗悦」夫はそふ  
 と彼君の「澤田」妻を見る途境内の梅を見ながら「宗悦」愚  
 老もお供ト宮神樂になり鳥居の内へ這入る引ッちがへて  
 「渡邊吉の丞」若衆かづら羽織袴若黨「丹藏」出て来り兩人  
 顔見合せ「吉の丞」恐しい悪事の工み元の根さしは父上様  
 「丹藏」過多な事をト押へ篤方御加贈お諫め申さぬ拙者め  
 は當國後手とばかり「澤田」村の産父は百姓丹助と申す十七年  
 前生さぬ中の姉が不慮の最期繼母と拙者に疑ひかゝり命  
 にも及ぶ處先代の旦那さまのお情にて親子二人りが免が  
 れし御恩報じの御奉公親旦那にはお隠れ成され母と妹と  
 二日市へ引取りしも皆御恩その旦那が明く成されたお  
 望みを御諫言申たお用ひ成されう様はを折を見合御



御見とト心を碎く其内に事被れば一命と捨る所存と聞  
て〔吉の丞〕忠義を感じ是より父上にお目にかゝり諒めし  
上御承引さくは此身を捨てト立を止め無益に命を捨給ふ  
御身と大事に若君の御守護なされ子を以て父を不義に  
落さぬ本丈と諒められ〔吉の丞〕とうぞ其内父上が〔丹藏〕  
此の望みを翻へされ〔吉の丞〕御本心にも成り成さる様  
せうと有つて心ならずも〔兩人〕形勢じやナアト便へ丹藏  
の妹〔お池〕田舎娘にて出て来る〔吉の〕丹藏が妹袖とちも  
參詣かる〔袖〕けふは姉の十七年暮参りから天神様へ〔吉  
の〕不慮の最期と上げしといふ姉の事かいかなる譯と聞  
れ〔丹藏〕今日の姉を産んだ母は産後で世を去り育て兼て  
知る人な養女に遣りし後藩が今の母丁度拙者が十四の時  
其姉が産身に成つて手らず戻り産落せしは女の子夫を問  
へと深く包み心氣を勞せし夫ゆるか取遣上せ翌年の今月  
今日赤子を抱いて出た徳行をしれず澁川堤に流れ死つた  
は姉の死骸赤子の姿は見わぬ故葬りせしは因縁話しに思  
はせ時を移しました〔吉の〕父上にもお待かね袖もそこ迄

〔袖〕お供いたすでムリ升ふト三人上手へ還入るマタ  
にて真右衛門の娘〔お浪〕逃て出る跡は浪人姿の〔淺倉  
九市郎〕遅欠て逃してたまる者かト引居る跡は〔福徳屋  
右衛門〕人の娘と無体に連れてト留るを〔九市〕汝が娘を  
妻にせんと幾度か言入れしをアノ、鶴のト云ひ紛らし返  
事とせお不届き奴この境内で見かけし柄は直權私岩へ連  
て行〔真右衛門〕ソリヤ御無体ト留るを聞す娘と連て行ふ  
とする所へ花道も吉村の娘〔千代咲〕御殿風の島田にて若  
黨〔新助〕袴股立の供にて来り千代咲は九市郎を見事に投  
る〔真〕よい所へ千代咲様〔浪〕よふ出下され升た〔千代〕  
見れば浪人体の者ト〔九市〕起上り我や女だナ能おれを  
扱かつたナト打て廻るを届けて打上手へ逃て還入る〔お  
浪〕おなた様のお蔭にて〔真〕親子の者が助りました只今  
の浪人は淺倉九市郎と申す能ない者お浪を呉るも申升れ  
と旨紛らせて居りましたに手らず只今出合し處無法に連  
て行ふと我を向ふは浪人あらは町人どよ仕様かと思ふ  
處おなたのお蔭で危い處をのがれました夫も付てお屋敷

へお出入致し御恩に成つた其上にも願ひ申すは此お浪と  
うか暫くあなたのお傍へ部屋子にと願ふ〔千代〕夫ならは  
いつこの事表向御奉公に私が世話と是にて親子は喜  
び〔お浪〕わたしも是から御殿の勤めとよする時は浪名と  
まに〔真〕エトお浪はわさんもさぞ御安心〔千代〕又も障り  
のない内に早ふお歸り〔真〕有難うムリ升ト兩人は花道へ  
這入る便へ以前の〔澁川〕出て来りコレハ、千代咲どの  
今日のお役目彼苦勞〔千代〕澁川さまにも能う御參詣〔澁  
川〕ナト密々にお咄し申す義かムつて〔千代〕ナニ彼密談  
とは〔澁川〕他聞を聞る義にんれば〔千代〕其方は別當方へ  
〔新助〕畏つてムリ升るト島居の内へ還入る〔澁川〕まづ是  
へト兩人床几へかけ御殿の内は人目多く待に待つた御代  
參その許へ御承知なら二世の堅めを致す存所と寄添へ  
は〔千代〕御座興も事に寄るあなた様には與さまのある事  
身の上不義のお家のさつ御法度お嗜み成されませト立  
つを引留め口説き立れば今日一ナ日は奥様の御名代不禮  
があると思はせぬぞ〔澁川〕その口元の愛敬がと差寄

る手先きをグツと捻上げ〔千代〕おなたは寢におゆるりと  
、突放し頃に成り御休息なされませと島居の内へ還入る  
跡にて〔澁川〕聞しに増る今の手練得心せせば刀に掛てト  
手の痛むに痛むさへ手にふれたりと思ふから腕腕ながら  
捨もおかれサト手を頂し懸は思案のト床几へ掛るサ道具  
かたり外じやわト廻る  
○同社内願望の場 △本舞たい願望の上へ色々の願を  
かけ下の方技を張の茶見世花道より百姓〔孫右衛門〕白髪  
親父にて負づるの形跡より〔お花〕島田娘願望にて出て  
と、さん亦差込ひかへ〔孫〕イヤ左様の事もない〔茶席の  
亭主〕鹽梅が悪イなら此方へ還入て休んで行なされお前  
がたは一ツ体ごこのお人だへ〔孫〕私しは筑後の國上野在  
の山家の者娘と二人りて礼所參に出ました〔茶や〕見れば  
能娘ツ子だが鐘を取たら樂にをられお事も有まい何で順  
禮などを仕なさる〔孫〕若イ時から此身に積る悪業の報ひ  
身から出た錆でムリ升る亦さし以んで来たわへ〔お花〕と  
さん確り仕るさんぞ〔孫〕大きに樂になつた此間に御參



階として行舟よ庭から博多へ出まど口はムリ升まいか  
〔茶や〕むしも是れから氷を汲に行舟案内をして進せ升ふ  
〔孫〕有難ふムリ升ト三人上手へ還入る奥より以前の〔千  
代咲〕跡より〔新助〕祈禱札を持出て来り〔千代〕春とはい  
へと未だ日短〔新〕とみて少しは暮升ふお急ぎ成れませと  
行かける下手より〔九市郎〕悪者共を四人語らひ出て来り  
ヤア仕返しを〔五人〕仕に来たのだト皆々兩人へかゝる新  
助は二人を相手に危ふく成るを千代咲助けて五人を相手  
に難義の所へ重役〔渡邊越後〕上下にて中間〔直助〕付て出  
て此中へ還入立廻り千代咲を救ふ是にて五人叶はず上下  
へ逃ては入る〔新助直助〕通つて還入る〔千代〕能所へ渡邊  
横何とお禮を申さふやら〔越後〕難義と救ふは相互の〔千  
代〕先年お上の御金銀へ盗賊入つて金子の紛失その折父  
は宿直の役目の階度に父主膳切腹と極まりしを親丹波さ  
まのお扱ひにて済たる大恩今亦おなれに救ると親子の者  
が大恩は死す共忘れは致しませぬト愛へ〔新助直助〕とこ  
も怪我はムリ升せぬかへ〔越後〕別當方へ今一度まゐる

間先さへ申てあげ〔直助〕奥りままたト上手へ還入る〔千  
代〕越後さま必らず御恩は〔越後〕アイヤ女中の身なれば  
少しも辱く〔千代〕お先さへ辱るてムリ升ふト花道へ還入  
る跡を見送り〔越後〕折よく彼が難義を救ひ互いに信義を  
筑紫道なきに心のゆるむ時ハテ快よと道具かはりの知  
らせ夕暮じやナアト道具廻る

○天神山間道の場 舞たい中足の二重岩山の張物すべて  
天神山間道の体〔孫右衛門〕杖にすがり懸に懸んで出て来  
り此寒いのて益く暮る此さし込み此山越ば里へ出る近  
道と救へられたが行けば行くはと山の中日は暮るし困つ  
た者〔お花〕何じややら心細い薬は先ツキみんなに仕たし  
ト背中を擦する〔孫〕けふは言ふかめすは言ふかと思つた  
此身の體重若い時から身持が悪く人の物はわか物と暗さ  
心に暗の夜を浅川現にかゝりし時澄に腦みし一人りの女  
介抱した時懐ろに居た赤子をおれの手に渡し袋に入れた  
守り刀を懸へて指さしを仕て願ひと思ふて抱上る其間に  
女は前の川へ飛び込たれば陸方なく夫から一念奮起して

其女中の跡も吊し長い間の難業と積るおひ目に土地に  
も住かね札所参り又二ツには身寄の人を尋ねて其方を渡  
したさモウ助ら口巳が命十七年の拜月命日ト腰の守刀を  
出し是を証據に身寄を尋ねよ〔お花〕とよして捨ておめれ  
升ふぞ心細い事言すに確りして下さんせ〔孫〕ア苦しい  
早く死にたいト此時上下より以前の悪者〔嗣六眼入〕  
そんなに死にたけりやア〔四人〕殺して還らふト出るを  
〔お花〕お前はさつさの〔嗣六〕博多の道を誰言とおしへ此  
山へ引き込んだ〔眼入〕深切を雲介だ〔孫〕何の恨みで私  
らと〔嗣六〕その美しい娘が見込みたしんで仕まへト立か  
ゝる〔孫〕は〔お花〕を圍ふお花は短刀を腰に差して逃やう  
とするを追廻され誤つて谷底へ落る〔嗣六〕ヤア大事を娘  
と谷底へ〔孫〕ナニ娘が谷へト寄ふトするを蹴倒し習々下  
手へ走り還入る〔孫右衛門〕ハ落るる山おろしにて道具廻  
わる

絶して居る上手に〔渡邊越後〕袴羽織下手に中間〔直助〕こ  
れを介抱して居る氷の音にて道具とまるト〔越後〕お花の  
傍へ寄つて活を入れるウント藍へる〔越後〕心をたしかに  
持てヨリヤ女〔お花〕とうぞ御免一成されて〔越後〕只今通  
りかゝりそちの氣絶を致し居るゆゑ介抱いたして還し  
た如何いたして氣絶せしぞ〔お花〕ととさんと二人り悪者  
に出合ひ逃るはづみに谷底へ落たと思ひし其跡はるんの  
覺れも夢うつつ〔越後〕夫で様子が分つた最早氣遣ふ事は  
無いぞ〔直助〕旦那さまがお出成されはモウ怖い事は少と  
もねへぞ〔お花〕御深切な其お詞有難ふ存じ升るト此時後  
ろへ月を出し是にて兩人顔を見合はせ思入あつて〔お花〕  
袖より漆も谷川の〔越後〕春の夜寒の身にしみて〔お花〕  
流れに移る月影は〔越後〕見れば見る程美しいト直助・顔  
見合せ双方よろしく暮

○二重岩山間道の場 本舞たい丸木柱茶座しきの横  
やう櫻の立樹石燈籠すべて菊地家とく庭の体より袖の腰  
元庭の掃除を仕て居ながら去年の春から上り成されたお



部屋さまは澁川さまのお身内とやら殿様のお氣に入り物がたい殿さまが打つて替つた御身持と噂の中へ切戸より前幕の(澁川)コレへ腰元衆おたゝみ成され今日は我君花見の御遊らんお掃除萬たん調のひましたか(腰元)お庭は調ひましたか(同)童子のお湯を見て置させせうと腰元は四人切戸の内へ這入る(澁川)これて邪戸は拂ふた岩橋は何をして居るかト愛へ(岩橋)出て来り日外の一驚を仕かけし處吉の丞さまがお傍にてトウヤラ毒と悟つた様子(澁川)親の巧みと知らざる故余人は明す氣遣ひなけれど渡邊氏と彼の方と二人りの中を(岩橋)萬事おけ目のない渡邊さま悟る處か氣ぶりも知つた者は(澁川)無ければ安堵(岩橋)夫に付けても顔名さまとしくじらる手掛りかムリ升ト文を出して渡す(澁川)コリヤ宗三郎より浪路へおくる艶書アノ二人りはとふふ小胸の悪イと存じおつた(岩橋)浪路が落せし處ソット拾つて置ました(澁川)これを御前へお尋すれば忠義立する宗三郎は差つり御腹(岩橋)アチ千代殿は能お返事かムリましたか(澁川)奥

表と隔たれば心に任せぬ委細を認ため薄雲に頼み置しが何の返事もないがト花道より奥女中(薄雲)只今この處へお上のお入りト上手お新習出て来り毛氈を敷く花道より(中將貞光)羽織著流し跡も前幕のお花愛妾(初花)にて出跡より小姓奥女中(桐壺前)木夕顔(茶瓶酒器などを持ち(浪路)其外近習(浪名宗三郎)皆々花道に并び花を詠むるせりふ有つて(しづ川)何れ格別我君には(岩橋)設けのお席へ(貞光)皆も一處に(浪名)まづお越一(皆々)有られ升ふト屋まで皆々庭の花を見る心にて正面の家の後ろへ這入る跡へ(薄雲桐壺)近習の(有村運平横須賀傳吾)残り花を見る目隠し杯を仕て居る愛へ(腰元)御前さまの御出と是にて四人あわて下手へ逃る(薄雲)袂かしぶ川の文を踏せ(貞光)拾ひ一寸見て袂へ入れる皆々これを知らず直中の家体の上手へ齒を敷き(貞光)腰を掛け常に見馴れし庭前も今日の櫻の花盛り又一しはの心地じやわへ(初花)今年に取分け櫻の敷も多し(貞光)そなたに見せたい手も多くの櫻を植させた(初花)其見せたいは門連ひ(貞光)

何ぞといふと奥々と奥の方へは足踏みもいたさぬ(初花)本木に勝るうち木なしと世の噂にも申升(山本)モロロ舌が初りましたか我々へお盆も(澤田)頂戴いたさぬ内に(澁川)浪名氏なども内々でお樂しみが有との事(浪名)一向屋にはムリませぬ(岩橋)そこら邊りの君さまとお樂しみなにお咄しと風の便りに聞きました(浪名)武士たる身に左様な事が(澁川)夫はト通りの申分コレ浪路とのそなたも知つてムらぶがな(浪路)イユく存じませぬわいなア(貞光)戀の話といふ物は中々面白い奥へ参つて酒宴を開き無禮講を免し遣はせは思ひくの藝盡しを致せ(山本)扇ふ所の御仰せ(澤田)奥へ参つて無禮講(有村)思ひくの藝盡し(横須賀)羽目をばつしく此時切戸の内より(渡邊)越後其御酒宴暫くお待下されませぬ(貞光)誰かと思へば越後(越後)此程よりの御身持ち終に政道の亂れと成るト宜しく諫言おつて只御遊興も程々に遊ばされ下さる榎願はしう存じ升る(貞光)今に始め越後が異見添けなく思ふと併し遊興は致せと政道の亂る榎

聞くは爾れぬ然一家てより樂しんでおつた花見の宴けふ一日は免して奥やれ越後(夫は鬼も角も必任せ(貞光)粹を尋らば安堵したした(澁川)御安堵は成り升り御政道が乱れました(貞光)チニ政道が乱れしとは(澁川)御前さまのおん目を掠り不義致してゐる者がムリ升る(貞光)予が目と掠り不義と爲とは何者じヤト怒る(澁川)外でもムらぬ浪名宗三郎腰元浪路不義を致してあり升る(浪名)又しても左様なこと何を證據に(澁川)儘な證據かムるゆへトいふを止め(越後)容易ならざる不義の證據場所も有ふに輕々しく召さるゝは鹿忍かと存ずる(澁川)鹿忍でもらぬ證據はこの品ト以前の文を出し何ソと覺わがムらぶがなト(浪路)懐ろを捜しく氣かひモノ夫はト寄ふとするを(澁川)この品御らん遊ばされ升ムト貞光へ出し名當はわりく(浪名氏)浪名(浪名)夫は(澁川)遊でも浪路は知らぬと申すの(浪路)アア(澁川)よも言障はムるまいト宗三郎刀に手を掛け死んとすると(貞光)待て兩人身の潔白も立するうち狼狽て死を致すか(浪名)ハツと扣へる(澁川)



かゝる証據がムリましても(貞光)先刻薄雲が落せし文其方が拾ふたかト薄雲懐るを捜して洵(澁川)落しては離にも致せ(岩橋)夫が証據でないとは(貞光)よく目を明て見よト以前の文と取かへて見せる(澁川)扱は薄雲(薄雲)面目もムリ升ぬ(貞光)伴右衛門とれにて讀上イト文を投やり申を處じやが大方はそれと蛇の片思ひ反古に等しき其証據よむにも及ばぬ(澁川)恐れ入ましてムリ升る(澁川)名「スリヤ我々に答めは(貞光)罪の定らぬは軽く行ふが政道コリヤ初花をしが手前で一服ト茶を立させコリヤ宗三郎死は易く生は難し一旦汚名は受くる共その身に覺わなき事なれば早まつた事いたすな過つて敗むるに憚ることなき本文其方の一身はこの貞光が扶助なれば我物にして我物ならず猶も忠勤はげんでくりやれ(澁川)冥加に余る御恩の極意有難く存じ事つり升るト平伏する(貞光)奥へまわり花見の酒壺を開くで有ふト立上る所へ(初花)下手前乍と茶碗を出すを取上げてわざと落し匿名が膝へ茶をかけ(貞光)サ、これヲ拭へト以前の文ヲ投げやるま

見て(澁川)ヤコレハ(貞光)手が龜相じや(澁川)何ソトか禮の(澁川)御恩は詞に(貞光)コリヤト紛ら(初花)の手をとり兩人とも跡より参れ(澁川)浪路(ハ、アト平伏する頃)に成り暫々付イテ枝折門の中へ這入る宗三郎兩人覺悟を極めし様子を見て(越後)御身ら命を棄ては君の情も反古と成不忠の不忠眞事は拙者にお任せ御前へ早くト兩人宜しく切戸へ這入る跡を見て聰明伶俐も初花の色に溺れし晝夜の遊興これ迄には仕上しが中々任はぬ心の底意うかつ事ば附れぬわへと合方に成り切戸の口より初花伺ひ乍出て(初花)渡邊様(渡邊)と云うて是へ(初花)常に顔は覗て居れと人目の間に話しも成すやうく後て来ましたわいなア(渡邊)我連も同じ事をなだの働かにて後迄は仕置せど浪名浪路と助けし手際(初花)中々油断はならぬ斯しく一所に居る様にいづ成られる事じややト密とふ所へ(岩橋)出て御前のお召し(初花)ハ、幸氣なト立上るを道具はより同じく奥へ廻る

○舞たい中足の二重舞張付の腰ひも都て菊地家奥取の



体上の方に貞光大玉を扣へ浪路小姓平舞たいに近習四人酒肴を並べ皆々酒盛り宜しく(貞光)初花が見への呼で参れ(薄雲)畏まり升たト立ふトする奥より(初花)只今夫へト出て側へ住ふ(貞光)サア一ツついで奥れト大盃を出すを留めても聞ず酌を仕乍(初花)私よりはまた外に御苦勞を成さる御方が(貞光)又例の奥の事か(初花)この御遊興も初花が習はず業と奥様には無お悪しみにムリ升ふ所詮お側に居り升ては女子の義理は立ませぬ(貞光)夫程心にそまぬならば奥を離縁いたそふ(初花)エ、(貞光)伴右衛門奥を離縁いたせば其方參つて取計らへ(澁川)其義は(貞光)成ぬと申か(澁川)此義は何卒(貞光)詞を用ひぬか参れト云時揚幕より(吉村主膳)ア、イヤ暫くトハタ／＼に成り(主膳)上下にて出て其お使ひ暫くお止まり下され(貞光)誰かと思へば主膳ぼつ返せト(有村横須賀)か立なされト立掛を押し返し舞たいへ來り御諫言申さん爲出仕いたせし吉村主膳を聞すみある迄はいつか此場は下り申さぬ(貞光)身不肖なれと菊地貞光家の大事を返り



見ぬ空気を思ふかといふ事から申て見よ(主膳)御幼雅の  
砌より英知の我君打替りし御行跡これと申も湯氏に等  
しき者あつて御亂行を勤め奉つるト諫るを聞かぬ(貞光)  
予が籠りの初花を湯貴妃に贈へは予を以て玄宗の空  
氣に比せしと手討にせんとする(主膳)本より君にさし  
し一斗合の手討は望む處(貞光)夫へ直れト立上る所へ(主  
膳)出て止め御離縁の義は某し能にイヤ君へ對して不  
禮ならん(貞光)初花が部屋にて酒宴の開かんコリヤ主膳  
今日か一て目通り叶はぬ(主膳)澁川始め皆まのれト退にて皆  
み奥へ這入る(越後)御心中すい察申すト兩人胸とさつし  
合ひ(主膳)某を御不興裝ひる上は願ひはあん身只一人(主  
越後)お頼みなく共一斗命かけ初花一人打て捨切腹致さ  
ばお家の治りとは存すれと君の悪行おはくの道理本も賈  
き君なれば御後悔の事ある時めく迄諫言申上らば初花は  
お暇給はり御行跡の改まるは鏡にかけて見る如し(主膳)  
夫に上てす良策なし此身を捨て(越後)ヤ(主膳)この身を  
棄ても御諫言お側の義は何分(越後)氣遣ひあるを吉村氏

(主膳)最早是が暇ト靜に向ふへ這入る越後は跡を見返  
らにっこりと笑ふ合方にて道具廻る  
○吉村邸書置の場 舞たい常足の二重正面唐紙下もの方  
玄關下女の(おぬひ)家中の下女(お宮)の髪と結つて居る  
大とふ能出来ました(ぬひ)コウセツ下りそこら片付て  
ト鏡臺を仕まふ(宮)お邪魔にならぬ其内にト下手へは入  
る床の淨るりになり(主膳)若黨(新助)付いてお歸りト主  
膳座に付き身共は書物にかゝればお客來は明日とお断り  
申せト障子屋体内へ這入る新助兩人は案じて居る爰へ  
(濱名)出て來り案内をするを新助断ると鬼も角もお通し  
下されと退にて(主膳)出て來る(濱名)召仕と退ぞ誠を  
明して聞せよといへと必すお察し下さるなと思にて宗三  
郎もかへる(主膳)この文函を千代咲に届け返事を取つて  
おぬ(新助)急な御用と承まれば猶や心にト断はると是  
非といはれ文函と持おぬひに述べ氣と附けよと囁やさ一  
さんに向ふへは入る述にて(主膳)書物と奥へおつて認り  
れば用事あつて呼返せらるるもなトぬひと顔と見合は

せ時の鐘三重にて廻る

○家中屏外の場 舞たい上方の方注むん燈城の石がけの張  
揚城内夜の休若黨(笹山丹藏)出て來り直助が御せ仕つた  
密事の御用文箱をこつらへ着上げて讀たら譯が分らん仕  
義に寄つたら若旦那トト此行燈の後へ忍ぶ上手と中間(主  
直助)文函を持出て來りお部屋さまへお文箱とさ  
のれ御屏の外から忍び込んてこの時(丹藏)辻おん燈を  
消し(直助)の文函を引たくり逃るを追りけ奥へ這入る東  
の花道より(新助)提灯を燈し文函を持出て來り雨が降て  
來たナ雨具を持って來ねへから困つたと雨車になり提灯の  
火を消すとパタ／＼にて(丹藏直助)御ひ乍出て(新助)に  
突あたり三人文箱を取合ひ(新助)は(直助)の文箱を取上  
ケ一さんに花道へ這入り丹藏は直助を引付文箱を取つて  
透し見る雨さ合方にて暮

てあたりひつそと鳴る鐘は無常と告る死支度(主膳)貴か  
しる梢の花も今の身に付けても書取を出せしおまよが事  
○委しく娘が方へ申送れば是もよし使ひに遣りし新助が  
歸らぬ内と肌をぬき刀をぬく後より(ぬひ)コリヤ何事  
新助との、歸りまでと留るを振り放し(主膳)おぬひ  
ひ)は氣絶する(主膳)腹へ突立るマタ／＼にて下手より  
[千代咲]新助付て走り出て[千代]ヤ、又上には(新助)御  
生害を遊ばしたか[主膳]おが御用は家治りなにて承  
知したで有ふ[千代]そのお文を途中において取違へたる  
其爲に悪人どもの巧みお知れ此と最期をさせまいと欠付  
けま一たがモン父上渡邊越後は大悪人でムり升る(主膳)  
悪人とは(千代)取違へたる文函の中に有つたは越後より  
初花とのへ悪事の段々しるせし密書道理を以て欺けは  
吉村は切腹いたし申べく(主膳)シテ其跡は吉村相果しと  
お聞あらば千歳の鳥に仕向けの一品離たに妨げられぬ様  
岩橋に御申付け離を立て候事遠からず花の君へと名當は  
まければ越後が手跡千歳の鳥は鶴千代君離鳥は彼が悴吉



の丞をさまたる者(主膳)をふとは知らず悪人の手立に乗  
りしか(千代)か殊に此頃渡邊初花との深夜に忍び逢ふ  
との噂以上に申上んと思ひしに(主膳)斯なり行も天なり  
命なり捨置がたきは家の大事悪を拂ふが肝要なり又新  
助へは一トツの頼み若き時召仕ひし鞍手郡鶴屋村の生れ  
あるさよといふ女に我種を宿せしに母を憐れ一寸八分の  
彌陀の像とわが定紋を自貫とせし守刀を渡し置しが夫  
を証據に奪ね當り其行末を頼むと(新助)お尋ね申して  
私がかつと世話を致し升る(主膳)夫にて此世に望み  
なし(千代)此身に受し恩義はあれど助け置れぬ君家の仇  
ト是にて主膳は引廻し格入るおぬいも必付て書き敷くと  
止り親を取らせ(上るり)書下す文休明けてはいはぬ文箱  
の内紐を結んで(千代)彼を途中へおびき出しお家の及び  
除くは今宵も新助は赤合羽を着て向ふへ千代は愁ひの  
仕打にて廻る

○馬場先仇討の場 舞たい一面の竹矢來向ふ馬場の遠見  
すべて大寺夜の体上下より火の廻り出て双方へ別れは入

る花道より(千代)出て舞たいへ來り新助に行違ひ(新  
助)只今跡よりお出どの事ト雨具を取りに歸し新助の赤  
合羽を着下手へ忍ぶ上手へ(越後)中間と連出て來り直助  
は大事の覺心掛りの事じやナア(千代)渡邊さま他聞と聞  
る事なればト是にて(越後)宅へ歸り後刻迎ひに仲間と  
かへす(千代)この一通と渡し對を切らんとする所を刀  
を口いて脇腹へ突邊ひ(越後)狂氣せしめ千代(千代)今  
宵手に入る密書と若君を毒殺わが父に自滅させし悪事私  
しに打果すは渡邊の家名相續させん爲(越後)とよ聞りへ  
は生ては置れぬ(千代)何ぞト立廻りに成り越後を切倒し  
止りをさすバツトにて新助傘を手にて提灯を出す  
(千代)是にてお家は萬代不易越後が悪事は此場ぎり必ず  
共にいふまいぞト証據の密書を提灯の火にて焼く我は是  
よりお目附の宮下氏へ名乗り出ん(新助)これが此世のト  
顔を見るを木頭用いたる合方にて幕

○三幕目 宮下宅留別の場 富足の二重玄關つる宮下住  
居の体丁女(おひで)お屋(掃除)をして居る傍に賣木屋(真

吉)本と見せて居る(おひで)御逗留の千代咲さまが御らん  
成さる六ツッ敷本と(真吉)昨日の太平記の跡がムイ升ト  
本と置て向ふへは入る(三男)三の助(出)千代咲を助けた  
いとへ所へ女屋(桔梗)田の子供心に三の助が喜ぶも道  
達賢は本より向暗から有利難な生れ殺すは惜いと心を  
痛のト敷いて居る所へ(主)宮下(三右衛門)家來主税を連か  
へる當、願ひの通、御腹と指定致したト昔を顔を見合と  
花道より(新助)トの仕ても渡邊さまの悪計をナチとけお  
助け申し宮下に逢ひ替は六日主人は睡さまお醒さまへの  
お使ひ密書とは知らず持行く途中誰かお知れず拙者文箱  
奪ひ取るを等々内に取違へお尋ねさまへお渡し申せしは主  
人主膳に自滅させ若君さまを毒殺させん密書おぬい様  
さまと打たれし次第ト三右衛門悪心しシテ其密書は(新  
助)自身は火中たされ升た(三)明日申の刻大長寺に於て  
御腹と極れとまだ一日の猶ほあり汝は是より心當りを奔  
走なして証據の品々尋ね出せ(新助)心附ましたト一さん

に向ふへ通入る(三)身其は是より秋月氏へト羽織を引の  
け主税を供に向ふへ通入る引違へて萬右衛門來り千代咲  
に眼乞の對面を枯槎にトツツワおなたのお情にと願ふ(桔  
梗)夫の留主には叶はロト(真)の耳へ尋やく此道具放れ  
座しき庭口へ廻る(千代)太平記を見て居る(真)符を持掃  
除の体にて逢ひお世話に成りし渡邊も演名さまが忠義と  
お上みの恩召で夫婦にされたの事聞がトりへ婚姻も調ひ  
しお禮と數代傳はる吉村のお家の絶世様お願ひ申たト  
選ひるを聞かす千代只まき馬を御回向が又と我とへ何  
ぞ追善(真)を頼まれは千代咲さま(千代)モウお目にか  
り好ぬト出行く跡三の助出て來り名残りを惜みナセ吉  
しては下さらりと敷く(千代)生死定めお身の上ト此太平  
記の捕公は櫻井の癖にて正行さまへ忠孝の道を教へ給ふ  
御身も天晴宮下の子息と名を遺給へト互いに名残り  
惜ひ成へ(三)出て三の助と奥へ遣り俣へ示しのお禮付  
ては明日大長寺において御腹との事(千代)願ひの通り仰  
せ付られト喜ぶ(三)思へば惜き(兩人)愛別離苦ト宜く幕



○四喜目 渡邊越後宅の境 渡邊與助の体は袖見に逢  
て来る「丹藏」千代咲は「直」といはいれの後川堤で水死せ  
し姉の娘が部屋様夫を願へる命乞をする「お袖を  
歸す花道々」吉の丞「出て千代咲が命乞の願書を出し腹を  
切ふ下は丹藏は御節と一ツでない御節は天が見通し  
と留る内様の下に伺ひぬ」新助「見附る」新「様の下より  
出て空に運入り聞いて居た」夫と實を明し合ひ「吉の」日  
外直助が「直」し「直」所「直」中「直」夫が有  
る御書家へ忍び入にも及ず「吉の」其書は「新」火中  
れ口外するなと戒しめ「吉の」夫と實を明し合ひ「時計  
なれば」ウッ入ッ「丹」どうぞ首尾能く「初花」部屋様の境へ廻る  
「初花」丹藏の心と込「親」親の手紙また一通「吉村」氏娘へ  
送り「直」直の身と捨て千代咲が命乞「直」不孝の首謀  
「直」は夫の罪の由「直」書置を置く「直」寺の裏門と直見  
「直」見たる所に廻る「直」余々「直」直の目にかし「直」  
「直」出てお「直」へ来るは中間直助「直」愛へ「直」直を直  
欠「直」直事を知つた千代咲が死ねば安心金を貸して下

い否なら直と直を調合した事をさす「直」夫と  
言れてたまる物か「直」直とんるる金を下「直」出て後で聞  
た直事の根ざし二人も共引で行「直」三人立廻り主税出て御  
加勢いたす「直」直助「引付る宗税は通行を新助退欠運入時  
の願にて白地の書を願うたる直助へ廻る檢使「直」其  
外目附書々出る下手は三右衛門千代咲出御書を聞て用意  
の座へ直り「直」直見附け「直」直所「直」主税直助を引立て直  
事の方人見かけ「直」直「直」千代咲との誓く其書は白状  
せ「直」直書させる直助直心して直して直といふ「千代」直  
決心して運刻は直れ「直」直「直」直に成り「直」直  
「直」直で直る本の如くは直仕ひ成る「直」直書を出「直」  
直る直書の直書「直」直「直」直命を成りし上からは「直」直  
直御前「直」直「直」直

光初花が書置を出して見する此文休では「直」父の命に聞  
し姉上は「直」愛妻初花ト愛へ吉の丞切腹せんトするを三  
の助留乍出るを直か直に直なければ家名を絶す謂も直  
渡邊吉村家名は其儘ト千代咲は尼と成り親姉の菩提渡邊  
の直親を直んと是にて三の助を吉村の直子に直せと直光  
の直「直」直は直代不直ト直「直」直

られたを頼むと直と直者「直」直出て今二階で直平太が直  
の起請を出「直」直八に突出された直者と直れた「直」直し  
る直と直で一杯「直」直入る「直」直を直ねお柳来り「直」直といふ  
直人で高市直右衛門といふ人へ直入すと直みの印しも直  
替し直と言れねは直「直」直「直」直高市直では直かつ  
た直しが直合升から直氣は「直」直直入る直頭お柳を直  
所「直」直倉屋の後家手代直吾七内へ直入るお柳は直へ直家  
は直八に直ん「直」直呼に行き直八来れば直家直見し  
お直の直と直太夫様は直宗の刀紛失故か直「直」直  
ウッ「直」直と直故の直直と直隠して直吾七「直」直  
直人出て直八「直」直取た直附を直ふとする判じ物中へ直  
入跡金百兩直る約束にて直「直」直へ「直」直出て判じ物「直」直  
直「直」直直人お柳出て二階に居ると思ひ直八名直の直  
直しへ直附直子の内へ直直し二階「直」直下りお柳を直  
直んとするを「直」直「直」直「直」直「直」直「直」直「直」直  
直「直」直へ直門直兵衛下りて直船に合ひ直茶碗か直つ  
た直「直」直「直」直「直」直「直」直「直」直「直」直「直」直  
直八さんや直浦直の直直「直」直「直」直「直」直「直」直「直」直  
はお柳を直て花道へ二階にて三國一の直間直す直した  
直人直船直度直上「直」直直直



○林橋床見世の烟草屋愛へ迷子の米ト浮んで四人遣入  
る〔忠〕お柳と連與之助の迎ひに行逢ひお頼み申升ト別れ  
御門の待所へ母子を抱て来り妹の米が見えぬ故尋る處  
この子を抱て呉れト黒船に預け歸るゆへ抱し居る上手の  
婿方御門出て来るを呼止り子を煙草屋に預けお柳様の五  
郎八さんへ還つた文ト小漣が起請と戻してくれ〔庄〕愛は  
ねへ又持て居て出さアと云する〔忠〕こふするト立廻  
り子分も出て掛るを皆さ込み返ふとする親方子供衆とト  
抱子と受取行ふとする上手黒船内へ濱路出呼止お柳の扱  
込し文を聞き不義が有ては用捨は成らぬ〔忠〕シテおまた  
様口〔流〕仲入濱路源左衛門明日身が屋敷にて婚禮〔忠〕生  
て歸らぬ冥途の宰領ト約束をせよ幕

○濱路源左衛門酒を呑居る〔流〕出て馬淵氏には  
能こと御入来ト中間出て黒船町の忠右衛門が参しト〔和〕  
おが兄敷右衛門が婚禮の妨げト忠右衛門眞三ツに〔流〕お  
柳ト不義せし五郎八をかばと黒船命を棄て婚禮を結ぶか  
但しはお柳を得心させ同道せうかト〔忠〕お召に任せト枝  
折の内へ遣入る〔流〕流石は黒船シテ嫁に〔忠〕御門前途ト  
子分衆物を御眼をとして死體の迎ひに來いと歸す〔和〕死  
支度は能覺と嫁のお柳口〔忠〕符牌を出し然る今日たつた

今死に仕舞は非違おない併し婚のへせぬ証據逃つしや  
なら冥途へ行か二ツ遊の案内は忠右衛門かおの世の宰領  
〔和〕位牌の祝言四海浪には治らぬ〔門第〕イヤ我々がト立  
掛るを〔流〕お柳へ成されト止り用意の品をト中間大組板  
を置す能折求めし白箱の摺み料理は黒船の新身をためす  
活作り〔忠〕土極替りの組板へおみ興を居たればピクとも  
仕ねへ産れ付尾飾ハケチでも胸たに穿つた所は産後もね  
へのが早月の吹流し口先尋りと思ふなら片身おろしか筒  
切りの御勝手次第ト急度見ぬ門第源左衛門立廻り切付し  
組板へ直る〔流〕其意をなら言聞ん切人は濱路源左衛門  
〔忠〕何正宗〔流〕天名の重寶ト位牌を二ツに切死體をト五  
郎八出乗物の戸を明る〔小漣〕五郎八さん〔流〕ア、死入が  
物を申は此刃物ト刀ト出をを〔五郎〕ヨリヤ尋ぬる正宗  
〔流〕通上なすも寶又たる次郎太夫殿に御道を受たる恩を  
報ずる寸志〔五郎〕正宗戻れば勘當も〔忠〕ゆりて再び本地  
へ御歸參ト目出度打出し

明治二十年四月廿五日御厨

(定價金八錢)

東京淺草區淺草町一丁目廿壹番地平民

編輯人兼 出版人 深谷龜太郎